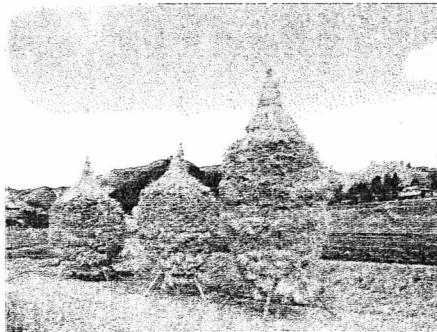


まなれ歴史通信

第38号
2006.3.1



初原地区の「わらぼっち」

大子町初原地区は町の北西部に位置し、花瓶山（標高六三六メートル）を水源とする初原川の中流から下流に沿って開けており、標高一五〇メートル～三五〇メートル前後の平地を標高二五〇メートル～三五〇メートルの山地がとり囲んでいる。北部は茶畑、南部は水田が開け、散在する農家以外にこれといった目立つ施設はない。地区の入口にゴルフ場があるだけでのどかな農山村である。

一昨年、初原地区は財團法人グリーンふるさと振興機構の支援を受け、地域コミュニケーション（地域社会）の核となる「初原ぼっち学校」を設立した。この学校はコミュニティの核となる学校という場を通した新たな地域づくりをねらいとしたものである。昨年度初原ぼっちの学校では、「ふるさとの魅力発見」を主眼に、「わらぼっちづくり

り体験学習」「ふるさと探検ウォーキング」などを企画し、県内から参加者を募り実施した。その実施に先立ち、事前探索研修会が行われ、初原地区内を地区関係者やツーリズムインストラクターの人達と歩く機会を得た。

平凡に見える地域であるが、ボッチ学校の名にふさわしく、稲わらを積み上げた「わらぼっち」が田んぼの道沿いの処々に点在し、懐かしい農村の原風景がみられた。

かつて大子地方の農家は、秋の取り入れが終わると、稲わらを保存するために「わらぼっち」を作った。農家にとつて稲わらは、馬の飼育の敷きわらにしたり、押し切りできざみ、糠などと混ぜ合わせて飼料にするためにも欠かせなかつた。また、各農家は農閑期になると、夜なべ仕事といつて「縄ない」をはじめ「むしろ」や、「わら草履」、「あしなか」などを作つたりする大切な原材料であつた。

わらぼっちは、作り方の差異はあるが、長い棒を中心にして、その棒が倒れないよう四本の短い棒杭を縛り付け、四脚を作る。そして四脚の付け根にわら束をしつかり固定し、両足で稲束の先を押さえながら、共同作業で順次小さいわら束を傾斜のある円形に積み上げていく。最後は天辺を円錐形にまとめ、高さ約三メートル～四メートル位のわらぼっちを作る。

わらぼっちは、当地区から消え去ろうとしているものの一つであったが、農業委員の仲野武夫氏（現ぼっち学校長）を中心とし、自分の田んぼにわらぼっちを作り、存続させてきたので町の冬の風物として知られるようになつた。

地域のわらぼっちは、当地方の自然条件に適応、対応しながら培われてきた「藁文化」であり、それは労苦の中から生み出された生活の知恵でもあつた。地域の人達は、ぼっち学校の設立を機会に地域の資源の保存にも動き出している。（小澤）

上野地区のテントヤマ（一）

飯村 畿道

テントヤマとは、種蒔きの時季である八十八夜の頃（旧四月一日）にテントヤマに登つて、風水の難がないようと天道念仏をし、オミキアゲをして一年の豊作を祈願する農村の行事であり、昔は保内郷のどの集落でもやっていた。

【蛇穴・蛇穴新田集落のテントヤマ】

蛇穴の益子貞一さんの案内で、土用のしかも台風一過の猛暑の中をテントヤマに登つた。急斜なスギ山を直に登るためかなり疲れる。やがてスリバチをかぶせた様な頂上に立つ。テントヤマだ。そこは既に涼しい秋風が吹き、流れる汗も吹き飛んで下界の猛暑がまるで嘘の様である。

頂上は二十畳ぐらいに円く整地され、その真ん中の一本の赤松の根元に、大日如来の石塔が立つてある。高さ九〇センチ、幅二〇センチの端正な長方形の真石で、正面に小さく『大日如來』と刻字されているだけで造立年月日などはない。

益子さんにすると、「旧の四月一日に平郷の奥の熊木も含め二十二・三戸で、平成四年の頃までやっていた。昔はヤドサシをヒラッて、酒やオツカシを蒸かして、石にオミキ、オツカシをあげてオミキアゲをした。サケノサカナは誰もが一重ずつ持つるので二十いくつも集まり、他の味見もできた。オミキアゲが終わると『ろつこんしようじょう、おやまはせいてん』を唱えて、太鼓と鉦をたたきながら、石の周りを左回りに三回めぐつてヤマを下りた。ヨツバラッて転げ落ちて来た人もいた。昔は女は登らず下にいた。『オゴフだよ』といって、手のひらや葉っぱ、重箱のふたにもらつてヨバレた。昔は雑木だったのを見晴らしがよく、蛇穴・新田が一日に見えた。また、笠松のような立派な赤松が一本あつたが、昭和四十年の頃に枯れてしまつた。

まい、その跡に三本植えたがそれも一本が枯れてしまい、今ある一本が残つた」という。傍らに、今も笠松の朽ち果てた巨大な根っ子株が横たわっている。

蛇穴集落の蔵に保管されてあるテントヤマで使われた鉦と太鼓を見せてもらつた。鉦は青銅製で経十三センチ、太鼓はケヤキの胴長が三二センチで経三〇センチ、製造年はないが古いことは確かである。

【磯神・小田貝・平郷集落のテントヤマ】

磯神の鈴木一郎さん（九十一歳）によると、「この部落でテントヤマをやっていたのは戦争前の頃までで、ここ五・六十年やつていらない。旧の四月一日にサケノサカナを作つてオミキを持つてヤマさあがつた。平郷、小田貝も一緒にやつた。平郷から道もあって、平郷の人らが登ってきた。ヤマの頂上は、結構なヒロッパになつていて大日如来の石が立つてある。ここでオミキアゲをした。高い所なので蛇穴の方がよく見えた。昔は集まつて飲むことが多かつた。それが何よりも楽しみだった。子供らもオゴフを葉っぱにもらつた」という。

磯神の靈松巖の手前の橋を渡り、スギの造林地を沢づたいに登る。やがて尾根に出て馬の背のような山頂に立つ。杉の古木に寄りかかるようにテントヤマの石塔が立つてある。石塔は、高さ八五センチ、幅二五センチの見事な長方形の真石である。正面に大日如来を表す梵字『』（ヴァン）と『大日如来塔』側面には『寛政十午天四月大吉日』、裏面には『明和七寅』廿八年今年記之、講中』ある。寛政十午天は一七九八年であり明和七寅は一七七〇年である。

思うに、この集落のテントヤマは、石塔を立てた寛政十年をさかのぼること一十八年前の明和七年の頃から、ここで天道念仏が行われていたのではないか。

大子一高 「98年の歩み」 完成

大子一高は、明治四十年十二月七日（一九〇七）に地域の強い要望により大子町外七か村組合立大子農学校として開校してから、大正・昭和・平成と98年の歴史を重ねてきたが、この度、大子一高から大子清流高校へと歴史と伝統を引き継ぐべく、記念誌「八溝 98年のあゆみ」を三月一日に発刊することになつた。

内容は、三編からなり、第一編は98年の歩みの概観で十二章からなる。「第一章 大子農学校の創設 第二章 郡立から県立へ 第三章 甲種農学校昇格 第四章 戦時体制下の歩み 第五章 新制高校の発足 第六章 生徒数の増加 第七章 多様化する教育活動 第八章 昭和から平成への移り変わり 第九章 閉校を迎えた大子一高 第十章 日タイ国際交流 第十一章 野球部の歴史 第十二章 座談会」。第二編は約百名の寄稿文（98年をつくり出した人びと）。第三編は資料編で「卒業者数・戦後運動部の成績・現旧職員名簿・年表など」である。

先生方がどのような気持ちで生徒と向かい合つたのか。生徒たちが何を考えどのようにすごしたのか、卒業生一万四千余名余の思いが伝わってくる。
例えば、岡崎勘助教諭は終戦放送を食糧増産の打ち合わせをしていた天下野（旧水府村）で聞いた。
「今まで張りつめた気持ちがガックリと来て、『日本はどうなるんだ。あすから何をすればいいんだ。』という様な破滅的な気持ちになつて帰途につきました。ある峰にさしかかり、自転車を押しながら、ふと右手の方を見ると百メートル位はなれた畑で、ただ一人何かを播いている人の姿が眼に入り、私は凝然

と立ち止まりました。炎天下の屋下がり、先ほどの陸下の放送も聞いていることでしょう。だが、たとえ日本がどんなになろうと、播かねばならないものは、やはり播かねばなりません。私もやはり明日から学校に行き、なすべき事をなさねばならぬいんだという様に気を取り戻して帰宅しました。」

昭和二十八年卒の藤田泰さんは、次のように述べている。

「入学式には兄のお下がりの制服で講堂に立ち、神永校長の式辞、小室順太郎父母の会会長らの祝辞があり、『農業は国の大本である。人間の生命を維持するために必要な作物（食料）を生産する大切な職業である。農業の農の字は脳（頭）を使つて手と足を働かせるという意味でもあるので、しっかりと勉強してほしい。そして三年間の学びで何を身につけて卒業するかを考えることが必要である。』などの話を感動をもつて聞いたことが忘れられない。・・・

卒業の時、クラス担任であった岡田先生から送別の言葉として『これから、人の嫌がることを率先してできる人になれ』と話されたことを肝に銘じて仕事、生活の上でも率先して行動するよう努力してきたつもりである。」

昭和三十七年から四十六年まで勤務した伊師教諭は、次のように述べている。

「今年限りで大子一高の校名は消える。折しも夏の高校野球茨城大会が行われていて、大子一高最後のチームはシード校に選ばれ、その活躍が期待されていた。・・・下館工に勝利して、球場に響く校歌を聞きながら、選手の笑顔、応援生徒の歓声、いろいろな思い出が重なつて目頭が熱くなつた。・・・」

この本を読むことにより、「学校とは何か」「学校とはどうあるべきか」などを考えさせられることと思います。なお、問い合わせは大子一高閉校記念事業・編集委員会まで（野内）

【昔の農家シリーズ】 お茶つくり

大子地方はお茶の栽培が盛んである。特に佐原、黒沢地区のように山間で、排水のよい傾斜地に多く栽培されている。

現在は、摘み取りから製茶に至るまで殆どが機械に頼っている。しかし昭和の初め頃は大部分が人手によつて行われていた。

五月から六月に茶摘みが行われる。お茶はいつせいに芽が伸び出すので忙しい。出来るだけ良いお茶を作ろうとすれば芽の伸び具合の一番良い時期に摘み取りたい。だからどの農家でも競つて摘み出す。お茶を摘むのは主に女性の仕事だつた。あちらこちらの茶畠に茶摘み乙女の姿が見られるようになる。

茶を摘む人は銘々に笊をもち、柔らかい新芽をむしり取る。

笊に一杯になると、大きな袋や背負い籠などに入れて又摘み始める。いつまでも袋や背負い籠に入れておくと発酵が始まり、熱を持つて茶の品質が悪くなるので、家まで運び広い土間などに筵を敷き、その上に広げて発熱を防ぐ。子供達も畠から摘んだお茶を運んだり、広げてある茶の葉を時々天地返しをして発酵を防いだり忙しい。大人の人は一日中茶摘みをやつていると腕も足も目も疲れる、なかなかの重労働だ。

玉露とか品評会に出す様なお茶は芽の摘み方や製法に特殊な工夫をするが、普通は以上のような方法で摘んでいた。

朝早く起こされて見ると、もう母親が先ず大きな窯で湯を沸かし丸い篩の様な蒸籠に茶の葉を入れたものを二つ四個重ねて蒸している。蒸けた葉を茶小屋へ持つて行くのは子供の仕事だ。



茶葉さく蒸す
せいろする

学校へ行く前に何度も運ぶ。

茶小屋にはほいろ（焙炉）が設けてある。ほいろは疊一疊分くらいの広さがあり炉は土で造つてある。中に炭火をおこし、その上に鉄棒を数本と鉄板が載せてある。その上には木の枠に厚い和紙を貼つたものが載せてあり、そこでお茶を作る。

茶小屋の板の間に蒸かした茶の葉を広げておく。ここでも発酵しない様に時々茶の葉をひっくり返して乾燥する様に気を付けている。ここでお茶を作るのは父や兄たち男の仕事だ。先ず蒸かした茶の葉をほいろにのせ乾燥させる。ほいろの上は熱くなっているからその熱で乾燥しながら揉んで製茶にする。

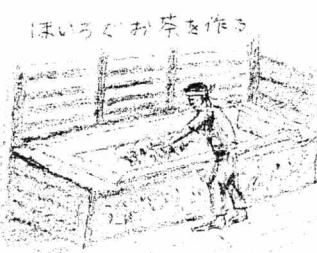
最初はぱらぱらとなんども搔き上げて水分を取る。次第に乾燥し柔らかくなるので、今度は揉んだり撫つたり茶の葉が細くなる様に様々な工程を施す。茶の葉の色も次第に黒くなつてくる。慣れないと葉が細くならず丸まってしまう。

製茶の仕事は、この頃の陽気とほいろの熱で汗だくになる重労働だ。一回の工程は数時間ほど、これを朝から晩まで繰り返すので、一日で二、三キロは瘦せると言われる。最盛期にはこの仕事が数日続くので、お茶を作る人も容易ではない。

子供達はそんな事は知らず、お茶の香りを嗅いだり、時々母が最後の蒸籠でお茶の香りのするまんじゅうや柏餅を蒸かしてくれるのを楽しみにしていた。

出来上がった製茶は大きな渋紙の袋や茶瓶、内側にトタンを貼つた茶箱等に入れて保管する。この瓶は子供の背だけよりも大きい。空の瓶に入つて遊んで怒られた事もある。お茶はこの地方の農家の大きな収入になつた。

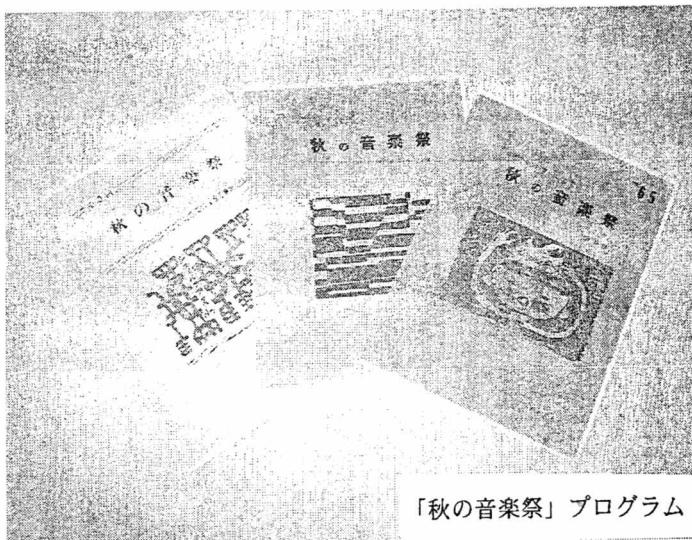
(石井)



お茶

歌声ひびく明るい町を目指して（三）

—大子町混声合唱団の足跡—



「秋の音楽祭」プログラム

大子町混声合唱団の初代団長である古澤慎也さんから、「君は音楽好きだから団長をやってくれ」と打診があり、石島康雄さんが「やりましょう」と引き受けたのは昭和三十二年（一九五七）の春先であった。石島さんが新しいばかり新聞大子支局に赴任したのが三十一年であるから、僅か一年後のことである。「団長たつてマネージャー的な面があるから、やつてもらえるのはむしろありがたい。違和感はなかつた」（池田数和氏談）、と

いうのが団員の受け止め方であった。石島団長を先頭にして合唱団は新たな第一歩を踏み出した。この頃の団員数は、まだ十名足らずであった。上掲の写真は、合唱団の活動の重要な柱となる「秋の音楽祭」のプログラム（石島康雄氏所蔵）であ

る。残念ながら第三回（昭和三十五年）、第七回（三十九年）、第八回（四十年）の三回分しか残っていないが、合唱団発足十周年記念として開かれた第七回目の音楽祭のプログラムに寄せた団長挨拶の中で、石島さんは次のように述べている。「はじめはごく少数で、グループだけで歌っていましたが、それではいけない。よい歌をみんなでうたう、よい音楽をみんなで聞く。そして町の多くの人たちとともに、その芽を文化の芽として大切に育て伸ばしていく、そういうことで努力を重ねてきました」と。少ない団員ながらも仲間だけで合唱を楽しむことから脱皮し、合唱団の外へ、町民の中へと積極的に輪を広げる方向で多彩な活動をみせ始めるのである。ただもうひとつ、団員を増やすためにには何らかの催しを行つて練習の成果を発表し、アピールする必要があるとの事情もあつたようである。確かに団員は徐々に増え、三十五年頃には六十人ほどを数えたという。町民にも参加してもらい、音楽を楽しんでもらおうとの考え方を具体化する最初の取り組みが、「秋の音楽祭」であった。石島さん、川俣雄司さん、池田さんの三人を中心には準備が進められた。看板やプログラムの作成など、必要な経費はプログラムに掲載する広告費でまかなつた。石島さんは町内の商店、企業、病院等々を尋ねて広告を募り、三千円ずつ拠出してもらつた。ちなみに、前掲のプログラムを調べると、第三回の時は二十九社、第七回目は三十六社、第八回目は五十一社の協力が得られている。なお、毎回プログラムの表紙を飾つたカットは二科会会員で大子中学校教諭の川井幸久さんの作品であり、無償で協力してくれたといふ。

合唱団主催の「第一回秋の音楽祭」は、昭和三十三年十一月三日に大子小学校講堂で開催された。町内の個人や音楽グループに広く呼びかけた結果、大子小学校、大子中学校、県立大子

二高の各音楽部、婦人や職場のコーラスグループ等十八組の個人やグループが参加した。午前十時から午後四時まで、一部、二部、三部構成に分かれて各々が日頃の練習の成果を発表した。

合唱団ももちろん、参加団体の一つとして舞台に上がった。娯楽の少ない時代であり、また音楽祭という珍しい催しであつたためか講堂には町長や教育長をはじめ多くの町民が詰め掛け、生演奏を楽しんで拍手を送つた。音楽祭は成功裏に終わつた。石島さんは、その日夜遅くまで祝杯をあげたという。音楽祭は、翌年も続けることが決まつた。

「秋の音楽祭」は、合唱団の恒例行事となつた。毎年十一月三日もしくは二十三日の祝日に大子小学校の講堂を舞台に行われ、昭和四十年の第八回まで続いた。手元にある当時のログラムに基づいて、音楽祭の内容を簡単に紹介しておこう。

第三回目の日時は十一月二十三日、午前十時から午後四時までである。主催者、来賓（大子町長、教育長）の挨拶の後、第一部ではグリーンガイドというグループの楽団演奏が、午後一時からの第二部では後に紹介する「よい歌を育てる運動」の入選作発表と表彰式のほか独唱、ピアノやバイオリンの独奏、女声合唱等が、午後二時半からの第三部では箏曲、ピアノ独奏、独唱、混声合唱等が行われた。演目は、全部で二十四を数えた。合唱団も活躍した。第二部の冒頭で団歌「うたいましょ」と「菩提樹」を披露した。また合唱団のメンバーも、例えば川俣さんがピアノ独奏を、池田さんと片野克一さんが独唱を演じた。合唱団の出番は多く、合唱団の活躍ぶり、充実ぶりがもつとも反映された音楽祭であった。

厳しい今年の寒さもようやく和らいできました。

編集後記

さて、去る一月九日に桜川市真壁福祉センターにおいて「茨城県文化財愛護推進セミナー」が、文化財関係者等二百名の参加をえて開催されました。研修の中で町並み見学も行なわれました。旧真壁町市街は、古い町並みが保存されているところで有名ですが、二月中は「寒い中、真壁に来てくれる人をもてなそう」、この一言から、蔵の街真壁のひなまりが始められました。平日にもかかわらず、この穏やかな雰囲気を求める多くの観光客が訪れ、大変な賑わいを見せていました。住民を中心となり行政と一致協力して町の活性化が図られています。

今、それぞれの地域の歴史・文化等の再発見・再確認が行なわれています。当町でもいろいろな地域おこし活動がみられます、「ほない歴史通信」でも、当地方の歴史・文化の情報を発信してまいりたいと思いまので、今後とも御鑒識のほどお願い申し上げます。（鈴木徹）

編集人

斎藤 典生（茨城大学人文学部）

野内 正美（茨城県立大子清流高校）

石井喜志夫（元 教員）

小澤 圓彦（元 教員）

吉成 英文（大子町立給食センター）

鈴木 徹（大子町生涯学習課）

編集発行

遊史の会

大子町立中央公民館歴史資料室 気付
久慈郡大子町大字池田二六六九番地

〒319-33551 02957 (2) 2627